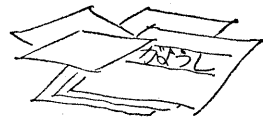


幼児教育と発達心理学

永野重史



—

大学時代に、私は心理学科に在籍した。私にとって、幼稚園児は、まずはじめに発達心理学の研究対象であった。ということは、具体的にはどういうことであるかという点、幼児を保育室の中で見ることをせずに、ひとりずつ別室に呼んで、あらかじめ用意した課題を与え、子どもの反応を観察し、記録するということをしていたということなのである。

今の私は、そういう種類の研究は、幼児についての、ある種の研究であることは確かだが、幼児教育の研究ではないと考えてい

る。幼児教育にとつてまったく無関係な研究かとたずねられれば、その通りまったく無関係ですと答えることはしないけれども、発達心理学の研究だけをおこなって、幼児教育について何か意見を述べるのは、たとえて言えば、物理学だけ勉強して、建物や飛行機の設計に口を出すのと同じぐらい妙なことではないか、と思っている。

いや、そう思っていないながら、今でも、現実に生活している子どもものことを忘れて失敗することがある。ついうっかり、子どもを発達心理学の標本扱いしてしまうことがあるのだ。

三年ほど前に、NHK大学講座の心理学を担当していた時のことであるが、講義のために、幼児がかいた人物画が必要になっ

た。録画の子定も追っていたので、ある保育園にお願いして、保育時間中にいろいろな年齢の子どもに人物画を聞いてもらうことにしたのである。子どもにしてみれば、妙なおじさんが現われたとたんに、いままでやっていたことを突然打ち切られて、「さあ、これから紙をくばるから、人の絵をかくてくれないかな」などと言われるわけである。たいていの子どもは、そのように言われれば、どうにかこうにか、人の絵をかくてくれる。だが、なかにひとりだけいたのである。人の絵をかくとしない子どもが。その男の子は、画用紙を横長の位置に置いて、なまずのようなものをかいている。何をかいているのかとたずねると、どうしようかと言う。今はどうしようがかきたいのだ、と言うのである。それはそうだ。急に人の絵をかくと言われたって、絵をかきたくないということもあるだろうし、たとえ絵をかくとしても、人の絵はいやだということもある。それが子どもというものだ。人物画の発達に関する標本を集めようというのは、こちらの勝手な要求である。子どもには、子どもの生活の流れがある。私はたいへん恥ずかしい思いをした。「発達心理学は、従来、とかく、子どもの生活の流れを無視する傾向がありました。」というような説明を番組の中でしておきたいと思ったぐらいである。

私の担当していた番組は「発達のメカニズム」などという題だ

ったので、番組の中で突然そのようなことを言いたせば、こんどは、聴視者の方々の頭を混乱させるだけだと思って、結局は、子どもの絵（生活としてではなく、作品としての絵）が、年齢とともにどう変ってゆくかというようなことを説明しただけで、人物画をかくとした男の子の話はしなかったのであるが、幼児教育の研究ということから言えば、これでは駄目なのである。

だいたい、これまでの発達心理学の研究は、幼児教育にたずさわる人間がいちばん大切にしなければならぬ部分を無視した形で進められることが多かった。

データを集めるのに、子どもの生活の流れを無視するというのもそのひとつだが、人物画といえは、すぐに手足はそろっているか、手の指は五本あるかというようなことしか気にしないというのも、幼児教育からみればおかしなことなのである。私の知っているある幼稚園では、絵を、子どもの認識発展の手段として利用している。自然を観察すると、気づいたことを絵にかかせるのである。そのような指導に力を入れてみると、子ども達の絵は、どうしても「説明画」とでも呼んだらよいものになる。例えば、木の葉をかけば、まわりがぎざぎざですよとか、葉のまん中に一本ふといすじがありますよ、などという説明をするために絵をかく傾向が強くなるように思われるのである。人物画について、手の

指がちゃんと五本かいてあるかどうかを問題にするような、いわば発達心理学者風の見方をすれば、子ども達の絵は、先生がたの熱心な指導によって、進歩するといつてよいようである。だが、

幼児の教育ということからいうと、私には気になることがある。よく見て、くわしくかくようにはなるが、絵が平面的なのである。子どもの注意は線にむけられて、絵に色彩が少くなるように感じられるのである。つまり、子どもの感情の表現として絵を見た場合に、どこかさびしいところがあるように思われるのである。幼児教育としては、このような問題を研究して見る必要がある。だが、心理学者の手にかかると、子どもの絵を、子どもの知的活動の所産として見ることに重点を置いて、実物をどのくらい忠実にえがいているかということばかりを気にする立場と、子どもの絵を、子どもの感情や性格の表出と見ることに重点を置いて、パーソナリティ診断をはじめる立場とに分かれてしまうことが多いのである。心理学の研究としては、子どもの絵のある側面だけをとらえて研究することも悪いことではないと思うが、幼児の教育としては、子どもの生活を総合的に見る努力をおこたってはならないであろう。

二

私自身は、幼児教育の問題を考えるとときには幼児教育の問題として考えなければならぬのであって、発達心理学者でござい、などと乙にすましてはならないと、自らいましめているつもりなのであるが、幼稚園関係の研究会に出席すると、現場の方々から、発達心理学者としての説明や意見を求められることがしばしばある。

先だって、日私幼の研究大会に、「劇的活動」に関する分科会の助言者として出席したが、私が問題にしたいと思っていたことは、幼稚園教育要領では、言語の領域に「見たこと、聞いたこと、感じたことなどを紙しばいや劇的な活動などで表現する」とあり、音楽リズムの領域には、「動物や乗り物などの動きをまねて、からだで表現する」とか、「感じたこと、考えたことを、自由からだで表現する」などとあるために、「劇的活動」と言われるものが、人に見せるお芝居の練習と受け取られてしまつて、他人になつてみるとか、物に化けてみるなどという、想像の世界に入つて自己表現をするという点では共通していながら、身体によつても、言語によつても表現し得るはずのものだという、子ど

もの想像的活動や表現活動としての共通性が忘れられることについて心配についてであった。学芸会の練習のようなことをするのは、幼児のための漢字教室のようなものとあまり変るところはない。子どもに芸をしこんで、これこの通り立派にしこみましたよと親に見せるのが幼児教育だというのでは困るのである。きめられたせりふをどうしたらじょうずに言わせることができるかということよりも、子どもたちのために何を育てるかということ

を問題にしたいと考えていたのである。家を出る時に私の頭にあったのは、イギリスのムーヴメントやアメリカのシンガー夫妻の想像遊びに関する研究と実践、そして、イギリスの学校評議会の補助を受けてジョウン・タフがおこなった「子どものコミュニケーション」に関する研究などであった。このタフの研究では、いろいろな働き（機能）をもった子どものことばをどのようにしたら教師が耳にとらえることができるようになるかということを中心とする重要なテーマとしており、子どもも想像の世界でどのような働きをもったことばを発し得るかについての分類をおこなっているのであるが、私には、あらかじめ決めた通りのせりふを子どもに言わせる訓練をおこなうことよりは、子どもが、いろいろな場面（その中には想像遊びをしている場面も含まれる）で、どのような種類のことばを発しているかをよく聞きとることによっ

て、教師が、子どもの成長の姿を敏感にとらえることのほうがずっと大切なことだと考えているのである。要するに、私は、幼児教育について話し合うつもりで出かけたのであった。ところが、実際には、私が前から恐れていた通り、幼稚園の先生がたは、学芸会の練習のようなことについて報告をするし（「指導書」の「劇的活動」についての説明はそのような説明をまねきやすいものになっている）、私には、それについての発達心理学からのコメントが求められたのであった。

私は愚痴をこぼしているのではない。現場の人々の、発達心理学に対する態度を問題にしているのである。私に向って、どうぞ発達心理学の立場からのお話を、と言ってくださるは、ことによると親切心から出たことであるのかも知れないが、スイスの心理学者であるピアジェが、小石の列を並べ変えると数も変わったように幼児が考えるのは、幼児が真の意味で数というものを理解していないのだと言うと、それでは、小石を並べ変えても数は同じだと言えるようにしてみましようというので、改めて訓練をはじめたりするのを見ていると、私には、やはり発達心理学の応用の仕方が間違っているのではないかと思われてならないのである。

発達心理学の応用の仕方が間違っているだけではない。そもそも教育というものについて、型にとらわれた狭い考え方をしてい

るように思われるのである。

三

教育というのは一種の生産なのであるから生産品がどのようなものであるかを明確にしておいて（教育目標の明確化）、生産工程の様々な段階で、仕様書と照らし合わせて、目的通りのものが出来ているかどうかを調べて（教育評価）みなければならないと主張する人々がいる。確かにそのような教育もある。あるというだけでなく、世の中の教育は、あまりにもそのようなものであり過ぎていて、だが、教育には、そのように、子どもを規格に合わせて変えてゆく教育のほかに、子どもの個性を発見し、ひとりひとりの子どもに合った教育目標をたてて育てるといふ、いわば、子どもの個性をはぐくむ教育とでもいふべきものがあるはずなのである。ピアジェが数の保存というところではピアジェの試験問題も出来るように指導しようというのは、子どもを規格に合わせて変えてゆく教育のやり方である。子どもの個性をはぐくむ教育では、ピアジェの心理学を、子どもが言ったり、したりすることの意味を考えるうえの参考にはするけれども、こういう問題もあるのだからこれも出来るようにしておかなければならないなど

という短兵急なやり方はとらない。子どもの自発的な活動（それを「遊び」と呼んでもよい）が豊かになるような配慮をしたうえで、眼を開き、耳をすまして、子どものしていることの意味を理解することに努める。そして、必要なときに必要な役割をとることであろう。もちろん、必要な役割をとるということの中には、「ものを教える」ということも入らないわけではない。例えば、玉入れのあとで、紅白の玉の数が比較できないで困っていたら、紅白を二列に並べるといふくらべ方を教えるのもよい。二列に並べたときに、一方は粗く並べ、一方はぎゅうぎゅうとつめて並べてあるのに、列の端だけに注目して、「わーい、おあいこだ。引きわけだ。」と子どもが言っていたら、その時点で、ピアジェの心理学を思い出すのはよい。ピアジェが示したのは、数がわかるということの「症候」なのである。子どもの心の成長について、様々な症候を心得ておくのはよいが、幼稚園は対症療法をやるための施設ではない。

それならば、お前は、幼稚園は何をやる場所だと言いたいのだ、と問われれば、子どもが自立できるようにすることを助けるところだ、と答えようか。

世の中で自立するためには、いわゆる社会性を身につけることも大切だが、知的な能力も大切である。数がかぞえられないよう

では世の中で一人前に生きてゆくことはむずかしい。だから、私は、幼稚園で、いわゆる知的教育をおこなうことを否定はしない。ただ、知識が、生きるということと結びつくためには、何よりもまず、子どもの生活を優先しなければなるまい。玉入れという遊び（遊びこそは子どもの生活だ）がまずあって、つぎに教をくらべるという必要が生じる。そのところで、心理学者のいう「教の保存」という問題も子ども自身の問題として出てくるのである。それまでは、保育者は、可能な教育目標として心に抱いておく程度にして、子どもの活動をよく見るようにしなければならぬ。芽は出てきたときに伸ばすものであって、人工的に作るものではない。知育、知育とさわがなくても、そのつもりで見ているれば、子どもの知性の芽はえはみつかれるものである。

本田和子さんと、横浜のある幼稚園を見せていただいた時のことだが、ひとりの女の子が、小さな食卓に、茶わんやはしを並べている。食卓の四方に、これから客をむかえる準備をしているかのよう、黙黙として茶わんやはしを並べているのだが、よく見ると、彼女は、茶わんはしをそれぞれ、の辺の中央に、そしてはしは、辺に平行に並べるように努力しているらしい。一応並べおえると、食卓を見て、またすこし、茶わんやはしの位置をずらすのである。食卓の準備をしているのだから、これを「ごっこ遊び」

と見るのもよい。だが見方を変えれば、「数学的体験」をしていると見ることもできるのである。私は、この女の子が無心に遊んでいるのを見て、はしの置き方（はしの先を左側に置くということ）を教えてみたら、彼女の坐っている辺以外の、左右の辺や、向う側のはしの置き方をどのようにして確かめるだろうか、などと考えた。発達心理学者は、空間概念の発達と称して、いろいろな「実験」をおこなうのであるが、このようにして、（テスト場面ではなく）子どもが遊びの中で、真剣にとりくんでいる場面の観察から、子どもの発達を見直すことはできないだろうかなども考えた。

学生時代に読んだ本の中に、野生のライオンは、風下にまわって獲物におそいかかるために、何十分もおあずけをすることができると、実験室にいるライオンの目のまえで、いくつかある入れ物のひとつに餌を入れておあずけをさせると、ほんのわずかな時間で、どの入れ物に餌が入ったかを忘れてしまうと書いてあったが、子どもの生活を離れたところで調べた発達心理学は、もう一度、子どもの生活を見直してみることが必要なのである。

子どもの生活を忘れた幼児教育が、子どもの生活を忘れた発達心理学で武装するなどということがあってはならないのである。

（国立教育研究所）